詩話叢

へ 5
2251

序

凡吟詠の作を風雅風流の変
而来て是誹諧謡ふ一風に止ざる
倒如ぞ屠代の俳風移世
必ず太平の氣象
動き光ふ彩文明と為ん世紀

遊てゞ如何様の事も有
共謝諧の句会ハ天来迄の
名ゝ〻ゝ二句の渡り毎に附
発句ゝゝ句ゝ〻草の五の如ゝ
去ゝの如ゝ当世點取ハ
句ゝにゝて亦逸興ゝゝ

友人露中子帯屠ふりの素色
高点の句數千に渡る書上
某ゝ我謡ひ鱠一枝筌に屬ゝ
如何ゝゝ小端ゝを雪むゝ
見ゝ如遊て江都字道のゝ
表紙ゝ高点の句作ゝ

好色句解の時うの部は、豆に蛙で
元祿ぶりで若眼鏡と題し
題取の肥の明家ぶりあんとさら
いろ　みみ出2　雪仙識

安永四年

初編　名順混雜

老荒 一丁	存義 二丁	平砌 三丁	買明 四丁	
来爾 五丁	李門 六丁	晋阿 七丁	祇德 八丁	
田女 九丁	寶馬 十丁	雞口 十一	吾山 十二	
菊堂 十三	常仙 十四	柳尾 十五	秀國 十六	
在轉 十七	寸松 十八	瀾臺 十九	金羅 二十	

百萬 七一
芙天 七二
左簾 七三
沾涼 七四
紫鳳 七五
紀逸 七六
芳竹 七七
大養 七八
秋色 七九
小知 三十
珪山 三十一
百蕃 三十二
餘八
後編三出ス
高点通り加ハル
付
家西
住所八不殘家祖之種ニ
表ハ見之ん事を後ハ

露入道

深川老鼠

ゆるぎいおいかがんをるる松ひ
女房ま朱ぬし強る精を
剛海の尾を大尾ま拭ハせて
吉原 傳ゝゝ美る菜畑
日ゝゝま日ま昏、生きむ此ハ
卯の吉ハ蕎ま老ゝまゝ魚
松ま 月 帝ゝ伯母ハ古ゝ
吉ゝゝ 宇ゝま 尾 漏まる
筆ま ハ通ま ゝ芭ハ ハ
世ゝゝ生ゝゝ 初ゝ考ゝゝ 稗ま子
まゝゝ ゝを 家を 原ゝゝる 尾

十八、

元、

[illegible]

有無菴

馬場存義

[illegible]

淵よ溺ふ孫ゝ逗かん冥概
鶏啼くてし謂る瓶火
角力見て来て角力元化
傘さしてし刷へ送入不破の算
比丘ゝ菊の花ひすまして譽罷
呉楚東南に海凄ゝ神京川
精霊祭よ十津坂本の小夜寐ゝる
人ゝの名をつけよ彩回の神
公よりも鍋をも日比よる村
ふる勤まるなしなみてくゞみ
来の飯焚く鍋ふりの村
深秋のいくまの仕付せむを託
孫を枕てし逝ますい粉

盃を添ふきとく強し急
移ふて宴の戸を遊る意の意統
注意絶の清めりて暇の宗
労暇の詞餘鉄をも海ふなぐり
後笑ゝ剣杭立ん啼張
踊る傍してりかえる寺
勝の旅る親の冬旅の冬入りて
素麺豊ゝて囲る中駱
る菊の池て鐘見て星
去住納ハ飯の君の名つるなり
三井寺へ朱よ引まる女中達

竹具足等を高き所に置
白魚の火を加へ夜下座敷
夕立は雲あつかへ雲の業
跡は初めすやう雲を探遊
家内他人に雲を特識
傘を脱ぎ清き花頂山
加茂の競馬に高い汗の口功
機高ハたしなみ西の京
渉の新次此功績窓入
道世の外を光り水を焼き
計留は毎の為入る旅衣
至ハ貸し夜い屋の祝第
古々の美を放す流る

獨歩菴

交買明

沿革の庭に出る土壁仲
西家を筑紫寺大井川
松風を琴ハ兵庫に
紅葉ハ下り原の市里
錦を沸く夜伽寺次く
過去の小寺の庭に家新沢
梅さす門を名残の家に仏
多彩に内家の数の紀年
雨風に清けり青の紀年
模様に来る尼の涼
立の風雅に寺の相伴

ゆくさい物も放ちりて機師町
芋の葉に露ハあへかき比叡爪
亭かきて写や衆給てもさぐえ
條綵姫を待兼て咲多みに桜
家根か近くて近所の見る瀬舟
白絹開眼をせよとて愛仏
されたも来り人ハ云へたるごとく
鮫てら孫と手宮に見えて桜に咲ケ
飴売ていざ改言ん角田川
衣撫てめくる帆て寿南に矢
田舎の筆に綴てきて咲
女房に御とりて塑ル鰍汁
之度めハ柿味噌に会の筍乳

正月庵　埜木本来宗

ましく趣ハぬ泉くもむ釣り
来へき夜に戸ハ立もせんもせん
浴中の仏を濯小家へ一ト来
燈しうら消くり帆の蛍乃火
美蟹もし鈴ハ毒なき玉に来
衣干房に夜に吸付こめ
主命に行てきめすむ丸め
蒲尾草の水て実見の袖ぬれて
厠に垣て一る流柳
茶湯もハ花の中なる大河だつ
写新て女房に向ふ読連

波打ち際を初て連て姫り通り
漁舟も棄て金杉の浦の
踏分て神ゝる神の通る道の至
神も流りて神ゝる初知入
縋きて花白ゝみてきれ
いてかゝてゝ吉原へ引
男の光る坂ゝ生姿
山吹の里よる梅枝元葉
上京へ出て本町る漁物屋
海源へ来て出る漁物屋
皆行仮名よ出る枯芦
たまさかるよう人なる人かる七歳
波切ハ女よ向る負て

又キ

藤孝門

葛菴

豈湯茶よ手ゝ射まゝ
糊百ハなゝ袖屋ゝ破ゝ
ゝつちゝ屋の懺悔ゝん
乗角ゝなれハ都歳もに
芋ゝまゝ異ゝ藤ゝ
秋まゝ人ゝ
波誠ゝ鬼の
ゝ赤ゝ敷ゝ
湯も赤川千も
測波ゝ庭の
鬼波ゝ

如来破るゝ公卒の迫屋
海しい附き泛やるる聲如
来堅も蕎まる松戸より係爾
横漬よ洲紙を偽ゝ杉ゝ振り中ゝ
枕り出ゝ来ゝちよゝ藤てえる
狩ゝよ洲ゝゝきも言より弱り
家庫より建てこないハ里迫き
君ゝまゝ尼ゝハ蚊ゝきけしゝて
掃出ゝ芝ゝ変ゝ財枕
あまう高ゝ蕪て尼より安洛り
長君ゝ狩ゝ科なる数ゝ偽ゝ
冥ゝい高ゝ人ゝゝみゝれゝ
うつゝみゝ横こほゝ多嘸

相應菴

杉浦晋阿

よ仏ひよ亟まゝハゝる画ゝ皿
家足ゝる温むるゝ
末枯の机ゝゝ仏の居
冬ゝる横よ流ゝえる聲女
出紀ゝ窓ゝ幕
西庫よ四角のゝゝゝゝ仏
夕鳥ゝ宿ゝ机呂梯ゝ
法ゝゝ宿ゝ角なる丈ゝ下
茅殿ゝけゝ叮る横ゝ
淋しゝゝ海なゝ寺ゝ
肯延ゝ横嗅ゝば寸盲一

巴國の法陀ハ深世の篇子碑
金板の高野親鸞杜丹
暖も蕨摘みハたまゝほとゝ
雲雀鳴くさゝのもとゝ思ふ
井の泊は恵も稲穂出る稲穂出
三井寺の引る女世
笠を二ハ夏草ふる
高野山ハ夏草ふる
寺石ハ櫓の茶屋の秋
十八、
寺る一ハ如
十九、一日ハ清せハ蓮ハ咲く三井の秋
行を清せハ蓮ハ咲く花の泉
さゝ山ふる名を稲ハかす宮

自在菴

仲祇德

日ふる雨ハ彩毒ハ朝ふる
弱ふるハ大門ふる角力元
大工ハ新ふる
音泉の法ハ紙染ハ実
蕨名ハ蕨ふる法を
丈ハ武ハ面ふる毒
高田の木ふる照永ふる
周山ハ緑記ハ法ぶく松木桃
雛桃ふる紅廊をなぶる
十八、
篇ふる光人を見と云つ
夏遠ふるハ名もをみふ川

七、

家内皆知れり

灵棚は苞にて

樂は苦なり

家内之今ふ

鮫は鹿丁

隔すれば男

子は母也

武蔵の

秩父も海嵐

伊勢軍は

眉齋

田女

太刀

一夜の川

陣中の

郭郭は

枕は

夜の田

まうるく

高は星

為代や

書は

親兵は

十八

三十

萬歳洞　小菅審馬

十八、

大、

桐林にある庵主の家にある
まつの内の半一丈の沖の石
紫に年偏りる緒の引誠
秀子摩秀子生まる黄の松
あ葉菖蒲左々訪の雲花き
松の風松かくうまき菖蒲しとやし
魚子宝奇り西の日のよ智子
極楽不孫子清訓の呼
うち待ける支婦常成く嬉の沢
該の細き交とと斗て本九年
料理仕りけて琴メる出る
志川の中なき時天来ぬ
傘も佛けたるし大御堂

獅子眠　谷口雉口

中むつましき兄
子と庵もく唄えるさん物相の
極なえ日なき蚕さく物くまん
孝行の理次第つく夜半の盲
子代を頼る松も檜子まで
如をく修めも掛ふ御丈け
手車筋より次く夜秋の行
該く蝉追ての付の座
服えんく続てた長夜の家よ徳
親公園の踊りを見てよ出て
せめてしよ斗紀念の花て蔵る

スキ

たつちくさ　夏柱たかく成ぬ　夜の雨
対はしら　遠山の雨　物しる
孤もの　素法も　乞ふ　秋の昏
一ぎふ　秋の夕　影　夢
いぶせく　もるに　抱き　脚　宿
ものく　夏の　影　すくに　毎
ちくさ　ものの　影　すくに　毎
ちくさ　ものの　影　すくに　毎
清の　魚　ふまく　みくく　子
泥　乞　乞　乞　佛　乞　乞
押　船　ぬ　ぬ　吸　ぬ　ぬ　妻
翠　竜　の　柱　ふく　ぬ　柱　の　宿
ちくさ　ちくさ　庵　ぬ　ぬ　ぬ　毎
影　光　ちくさ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　の　宿

師竹菴

越谷吾山

中　ちの　藻　咲く　蓼　ぬ　芝
六　京　小　刈　ぬ　帽　子　ちり
海　船　ら　小　小　ぬ　ぬ　ぬ　尾
ロ　十　よ　ぬ　尾　ぬ　ぬ　尾
弱　ぬ　よ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　人
紫　ぬ　よ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　人
紅　魚　ぬ　和　の　神　ぬ　ぬ　み
麻　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　女
狐　汚　ぬ　ぬ　尾　ぬ　ぬ　ぬ　毎
蓼　葉　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　毎
牛　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　毎

余江の長堤を内より注屋
御ま姉ま須戸より泥坊
ふ樹ん寺宮ふ石女の淋く て
瓶ち蔵く と やうな 高
追ふの小三押入る寺く
達橋ハ已も知る勝ま
乳黄ち新も日新の瓜ち蔓
二三町出る尾君ち鼻湯ま
月出る ち 焼ち 坊ち
乳母ち 河 意の蔵人
瓶 泊内 も 急る 神蔵
母寺る 蔓 寺ち 泊る 坂 箱
ち ち ち 橋ま ち ん ま る

十七、

又キ

雨夜庵

岐田菊堂

屋根へと走る雨だれ
言淋道より堀 面を出る
杉葉の已も雪人も来隠れて
ふ軒を丈を設く吉ち神
薄く 湯 足 ま 茶 食
ま ま ま ち 橋 ち 盃 橋
河 ち ち ぬ 出 ち 神 ち て ま ま
皐月の 屋 出 雪 の 屋
洗 橋 姫 を 常 の 大 ん
逸 て ち 人 ち 雨 の か け る 言
言 ち ち ま ま 幸 う に 出 吟 舟

ヌキ

雨の夜に猫こゝ気ふ時もまとり
湯かりんて仕上る氷掛しき
家配くなりにてまける瀬戸物屋
古亭もかく逆ゝ女人の三蔵仲
平井をかゝる山に渡る縁日
二人を梅が日向に菜釜売
各の知しぬるを文する辻私
鯉網を張る逆井の瓜畠
畔なる人を見て信ておんなき仏
袖の梅席に鼻緒たてる之
往遊るきもるくいへてかき草つみ
有り西を尾師に寸く蚊ま里
天井の絵いする鬼子母神

過来庵　志村常仙

陀河送る人一艘に積余り
まかれや瀬猫ゐて店を貸
扉光の田を銭ゑてまゝ手する
高凡実で行まて吸つけうく
はつちうに汀ぬ火つる新宮
深夜をぬきて見てある禅の袖
秋されて久しい魚の湯気へ来て
白紙の葉をこほん杜丹の根
子ぬ類ぬゝ女中客之
大判小風まで涅凡土用二十
薫保る花の新もある六年

明寺の子ども絶えて無し法
伊豆国の定杭ばかりの花
流れ松皆切れ別れやう
竹の老たるに魚なせよ寺の釣り
雲母坂を越えて来し医師
番の赤子に移る撞木
苅田に流れ清水山炭俵
熱湯牡丹くこ
樣の咲く行く桜ケる寺
烟泊製法の祝の日ふるう
九族の為に死ぬを苏る花
生垣の中より深谷の宮
枝雲ふ高く雲ふ烏瓜

ヌキ

三瓜菴

内田柳尾

茶食茶庵小柴ハ柴ひ柴
像面ふ砂の扉ま双ひ三
大和路ひ山ま
清明ま人ま八雑い夜ま
法衣ま川成ま源ま
黄ま道ま琴ま
泥坊ま出ま松
庫ま柴ま流ま
晴ま付ま合ま
涼ま横ま
三人の口ハ出ま

壽秀國

石壽觀

[illegible]

露哉

[illegible]

北在轉

[illegible]

世日仰ぎ滝口水元をとゝまる
上樣ぎ今日清ひ立の歌ハ
魂を切るゝ
東国ゝ哭まつゝ鬼の形
高ゝ泊る ゝ富ゝ
秋さゝ稲ハ妻ゝ名東
波ゝ ゝ
底金ゝ 治ゝ
籾ゝ ゝ
ゝ ゝ
小倉山一刷ゝ
山吹ゝ
子に踏ゝ 六浦の浦ハ河まゝ

手枕菴

三上寸松

所ゝ所ゝ藏ゝ情ゝ琴ゝ
欠ゝの内沈ゝ拾ゝ
敷ゝ形ゝ富ゝ
澤ゝ 肢ゝ立ゝ
ハ ゝ ゝ
ハ ゝ ゝ
孤ゝ ゝ
樣ゝ ゝ
弱い ゝ
ゝ男 ゝ
ゝ ゝ

東内の月明の頃より降つゞく夜の淵
四十年 載せて 俗も云ふ 元日を尾
今年も 同じ 雨 川 岩
山ちかく 京の比叡より 蓮華
橋 こゝ 糸 花
判 を 中 輝
杉 ヌキ
家 ゆ 日 二井の御傘
梅 香 ごと 年 ゆ
る 光 御 の 呼 俗
蛇 穴 を 出 を 附 ゆ 者 も 出 る

四曙庵

家 新 ハ 漏 笠 雨 降 る
擲 出 も 老 暗
埋 光 も 老 数 ゆ 生 り
家 和 る 鞠 の 侵 た
乗 る も 虎 ゆ 藤 れ ん 枕 財
転 抛 る 神 る 雪 を 手 挑 ん
東 沿 の 矢 も 潜 る 数 ゆ 乗
苅 田 ゆ 渡 る 亀 ち 松 る 町
汐 聴 ゆ 足
世 を 道 光 る 唐 ゆ 灯 も 時 部 山

岡瀟臺

新勝寺　魏を逸し　毋
遥御も　七七　を　拾ふ　孫
を例の　を　さんと　呼ぶ　の弁出　を妻
孫拾ふ　是　拾ふ　拾ふ　拾ふ　拾人
嶽津の　海法も　連帝　を半　まて
拾ふ　よつて　海　の　蕎麦の　を
家　に　を　を　知の　世　ふ　を
枝　を　戸　を　内　押　を　を　弁
堂　の　人　路　ふ　を　こ　ま　り
ま　を　を　庫　セ　を　て　流　る　家　毋
横　淋　き　こ　人　を　尼
分　ま　ハ　向　へ　ま　る　を　ま　中
ワ　ま　に　ま　る　須　方　の　状　箱

スキ

十五、

三十、

夜雪庵

東金羅

目を雨よ八答を高く四つ多かる
高しと見へぬ魚を拾ふ　お高
かるくとおるる兄お　お是　粕
家名ハ　なんと　一す　利　河
魚篇る　七八　麥よ　魚まれ
勝い　の　う　高う
蔵八も　蔵お　裾を　引まて
ま　いな　も　伽よ　出　粉る
地昭　書ハ　地　の　堤　海
ま　目れ　ま　ハ　人　も　ハ　居
投る　石　ま　み　ハ　よ　一　か　つ　ま　上ケ

廣風の法物より天に始つる
うなきよ　おもも　命なる　芽
葉〳〵　乳〳〵　脇より　みなる
程〳〵の　色い　紅〳〵　かゝ
軟〳〵　蕾〳〵　ちんと　跳よ　雅を
立〳〵　玉仏　蕾沢て　天窓を　設沼
中心つ　ま　ま　見　なる　枝見
別色　沼　葉　ちんよ　ふッ六の　花
葉　葉　枝　庭を　青　葉　白　義を
河〳〵　たよ　乳　母の　乳も　出代り
旭〳〵　京〳〵　る　穴を　出　ほ　乃
燥　掃〳〵　ふ　ひ　ひ　る　の　法　言　麦
鞠　汚　ハ　乳　を　き　汚　り　友　ひ　り

十八、

ヌキ

伽羅庵　小栗百萬

紙〳〵　より　温人　より　笑ひ　出す
逆　ま　よ　法　る　呪イ　より　花
霊宝　よ　程　の　る　出　漬メ　る
い　神　も　振　を　る　紙　き　る
吹　出　日　も　新　る　梅　より　白ひ　て
ぼんぼり　京　花　る　義　より　花　乳
模型　型　る　る　大　工　町
生　形　よ　こ　る　集　る　火　吹　竹
就　舞　よ　ハ　書　て　学　ひ　る　附　る
皆　獨　ら　と　る　廊　の　解　丸
事　加　紙　よ　て　汚　上　ケ　る　達

スキ

みなと書筆も寛書に刷毛序忘
碑見てやまらり意きぬ年忘
屁に鍾より沙汰に雑集して
元見巴屁の紋に棗肉しく
白沙精一曲として赤鮭
柳含律に大黒なる蛇目
豆く胸を搗くやうる瞳の声
井戸掘ハ漏る夜比獄に炎えて
粥杖の二本入念ふ、大女
去芋に衣に見ゆる堇に上
秃に親てれし量と免
源坊ハ蕪に廣けて勝ち好声
みな年帰りて茶壁に目をりまて

三呼菴　河野芙天

傘さして出るや蝶々の行衛
牡丹の咲くや世を捨てぬ居
夜さこめて女房に茶漬す入
論旨え僧に相の深く見せ
鬼も殺まて合掌に寮
友達の参る女房子くなくて
部りくるしまぬる身雛
咲くつくりても秃に二筆より
庭に多く家にたまる杜若
一刷の影相にうしや夕鳥
陣屋への名を六部に云傍く

日新物うき世界の墓
を尖端物産の極なる仲
蓮華なる梅の彼の新津橋
屋を出る遠向へ風車
高ふ高く新の梅又の足袋屋
科なる紙問の出る樂へ迄
賣切る淋しく戻る雷市敬
子二人となれと女房もうく結
淋しさや結ぶ夜の意く市寺
常日の居ふ間の出る樂へ迄梅
卯の花の八日小釈迦も沖の石
葉版と名よりと立迄如意寺
流れを流れて源川へ溝へ

スキ

素湯菴

さに淋しきむよ女人堂
地の如ふ自由結る茅の新
二ツ雲へ人の負ふる杖うま
皐月の扇迄へ出て雲ふ
日よ立もうて姫を家の極る系
冬澤る此ふ柳東
迄人小ふ結ぶの裏屋
九重の底の冷へ流
能因の古ふを雨やう
此ふ又ふ若麦稲へ行る仲の居
寄居虫を取りよ牛ふまる医師

笠家左簾

芭蕉葉の葉うごく動く法窟
脱ハ照り葉と降る秋の雨
潤布のまもも見へる夢のち
九族の為よ詠ちき萩の花
生茅よ流ちに茅の葉
こうに結ぶ
忍ぶべき蛍よ流灰の笑顔して
数搖ぶきの子の日の松の葉
糸新ハ漏しも新の陰
見し愛ハ枕ちる源氏
草よ傍の蛍る大年

スキ

一首 ゆしてる温まる 蕾
君まもまたいハ蓮生の蕾よ

東巴庵

北沾涼

風車ゆけ廊の坊主
菜釜ハ光る雲菜屋
枝だくを叶ぶ横よ車坂
鐙屋よ墨きの丑寅の年ハ
菜をつく工夫も巡る車
鬼灯をまる流る立田姫
素面や掛行の蛍車
漫医者も逸るうう雲
駕もも泣る屋の莫啓
牡女ゆ胡蝶も枕ち忘
母の年丑今と書字の数

かゝいせやるをだまきよも 蕎麥 椒
白浪より引出て角文字より玉
牛より 蕎麥 第〳〵 一る 追 宿
結〳〵 思る 抽 別 の 波
滅こい 源 石橋 泉 あ る 鬼 る 母 神 豊
拉〳〵 菓 羽 織 と 智 り 高 う 紀
鬼のたゝねようつる 天 人
甲るハ 京 みと 書 な る 高 ひ 作 淺
京 良 け て 伊 智 へ 無) 女 る 士
寺 治 へ 作 う る 仲 枯 船 り
軍 学 卓 の 向 よ 渥 仲

十八丁

東

御花園

角四方 奏二人 竜 二 座 よ 足 る
九 寸 よ 位 拵 も 寸 法 黄
如 る も 足 る 小 座 方 毎
四 条 の 町 ハ 年 文 ケ 女 書
遊 る 楽 火 て 足 紫 高 に 紙
う な る 楽 に う う 止 ム 糸 車
四 極 方 門 て 被 る 就 黄 氏
茶 の 唐 火 方 安 な 紀 夜 よ 茶 た て 宝
末 賀 て 松 も 方 方 て
極 て 螺 追 よ 供 表 追 屋
る へ 巻 方 よ 吟 も つ く 俗

魚かいと紙の流れ渡れば船
渡れば魚をたくみしるる
流の蛍を二度よそへてまる
帰るおろかせがしのぶぐり汁
家和ずして蒲鞠使ふ
面まれば家へ来まる辛
懐紙神にそへて帰る孝
こそ伝庫るれば耳へまを尚
露見えて誉れ人
とこの魚も量絵のやうな初漁成
まさう酒とハ祝ぐれば宮沼
除夜火火も量より灯を仲の居
妻ハ橋て人ハ出ぬ伊勢

スキ

四時樓

慶紀逸

苅さハ流れ泳ぎ炭俵
石菖ハ陰ゑ書記風ハ文
研屋へまて小町ハ宛毋
蕨人の涙ハ釋迦子
形ハよ蛭流るる蛇丘尾
うてうく梅む古の神
鳥鼎ハ月ゑ九合羽
夫婦ハ知ゑ指
ゑまを二ハ刻る図面
五琴ハ笛ハ絲ハ糸ゑ
松居限て帰る蓮蜂

雅楽女が名を詠て出る伊勢踊
味又するまたまたも切れる尾
鶴雪が又も知らぬ初瀬山
高びきも切れぬ知ぬ知ぬ知ぬ
宇治野が妻の芦も角ゑ字
高ゑ鳥源氏よりする物ハなし
中ゑが咲く蓼が
意よ氏ゑ
柳鶴肉ても魚ケる神楽
題櫛林うごく一茶
さくらゝ咲る行抜る寺
年既よ風も尖りて格子戸
荘子ハ十ゑ寺ゑ而くたい

スキ

墨釜菴

田口芳竹

京が格ゑに小糸女ゑ氣
ゑ書よゑ変ゑ身る毎
糸屋のゑる行よ世常深
名ハ古ゑ京が新造ゑ出す
鶴ゑをかき三ゑ代遊宇ゑ
魚尺ゑ変ゑ都ゑ桜糸り
鶴ゑ蛇ゑ毎ゑ吹雪
宮京が秋ハ柳ゑ義る牛
まゑ新の変ゑ牛也へ変が鍵文
未社ゑ抜ゑ茶部る伊勢
鶴が変ゑ陸ゑ

ヌキ

新造ちゝ味方に芝居ゆきらしく
初立来て　画れなし　京
古寺も来んハ女の　笑ひきす
此様をよあてゝ進む　衣紺来
清代ゐ亂　毋に婉ゐ懸勤
夜きみく灯え白　子ゐ宮恨呉語
人ゝ先に蝋　鶏り初る　半戸人　尾
古ゐ〳〵貸ゝゞ比師の様ゐしん
来風に高ゝ先ゝ見袋ゐ　晩
路景よきく辛ゐ薔　清ハ涼しけて
気ゝ画らゐ　笑を　見るゝ　婉
読哦し　ちゝ　二段　数を婉へ
伊勢ハかゝられて　胡堂かく　私

津婦人

津下大養良

今晩ゝ　様え　ならし　初漱　虎り
ほ名ゝ景しや　酒ゝぬ　宿下り
さちゝ向ケ家も淋しき圖　両
榛姫よく　云ぬ　恨も　おもろしれ
よし京て　釣る武士の　おもしろえ
蚊柱も　涼むに　入りて　何ゐ亳
栽ゐくせ　編に　来ゝて　歩　人
古市も　宕戸稲ゐく　韓ゐ来ゝ
芽の獨　流ゝ加ゝの　明ル日
漱にかいゝんとゝん佐し　盃来る
六十晩に　見えぬ　千瓢

又キ

清くも猶深き庵に初松魚
鮑に精の凄ようつる堂々当
當えり只猶てもなく魚とらう
尾花の袖に枝うる春にも月
拭ふ日ハかしましい崖縁
ほとゝぎす人を待夜の村枕
裳うつ繍し月に乗り行
灯もえんとほと谷川の丸太舟
深夜うろく狐も灯す水呂寺
他に経の音も流しの夜舟の放生
葉烟に雪洞子まき小松川
雪の日舟内へ漕ぐ魚ハかり
雛に寝を着し宿に絲て芸

野菊庵

深川秋色

牡丹へも蝶の折りうけ雷ある
入院しき夜の凄い山寺
牛も宝る八よし渡し舟も橋立
雨へも楽屋女の女房
古に名のみ知る井戸茶碗
妻の鼻ぬるい庵き
行糸を切れ始まる鼓よなき
深き女子私の夜てお なとま
河豚提て道具揃る宮ぬ寺
桟橋を送る楽屋のなふしきて
姉ハ字よ絡仕を譲る雛 家

[illegible]を[illegible]湯女が[illegible]別
お妻が年を[illegible]鬼やらい
石女をせめて[illegible]やく[illegible]
雨晴を待[illegible]ある凡[illegible]が岩
又張り[illegible]坂も[illegible]の寺
書[illegible]待つる[illegible]急ぎ人
合点で[illegible]が[illegible]実[illegible]り
白石の方を[illegible]見[illegible]出拍子
かつ[illegible]る[illegible]猿[illegible]
[illegible]を[illegible]日八[illegible]
追人北小[illegible]押入[illegible]
[illegible]の[illegible]
接穴も[illegible]
[illegible]仲[illegible]士

十八

ヂキ

五十

神田菴

[illegible]
[illegible]の火も[illegible]の[illegible]
八十[illegible]
[illegible]
下[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

木村小知

ヌキ

麻手訶窓

林珪山

八潮の妻 [illegible] 大根も干わらるゝ [illegible] 大和の [illegible] 活 [illegible] 流 [illegible] 緑多村 [illegible] 菜も 四 [illegible] 君は [illegible] 蜻蛉の [illegible] 日八 [illegible] 車

呵責する本堂より上へ迯のぼり
親より仰せ付られ鬼子てもなく小松殿
嘗て江戸より彫の社頭坊
知る人も知る鳥も啼く
脱んと云へも
藪入の日なれば所の
清水へ行て
鬼なる所も静なる日を生
立墓の
麻なれども
雨降り
猫四度あよいと神妙の桑の先
岩窟に漫へ
都の

又キ

漢和ノ評

百菴一原

宵行ハ闇夜ノ綻

凡そ天地の間や小水より稜々人池
早々女坪く
倚ニ松
馬ニ奴ハ根ニ出レ燧ヲ
渡ル天頂勝
守ル不人相
ゆる月を汲て
豊なる
為羽
孤の
う

つきくハ皆皇子と彩のなり
田樂ハ留真崎
山椒ハ秀忍岡
春の山も美しく下萌て
小倉船すやゑ吉の絵馬
藝者盛朝霧
按摩隙門涼
貧樂如泥亀
埋火ゑにしまさきの山
紙士ハ題目通る渭田の美
尾ゑ河ゆりかもめ
青柳さつつ嘴色のかなと
牡丹ゑ廿日菖蒲の艶昌

宗匠
利道昊岳
哥仙
存義
芝天
金羅
紀逸
寸松
吾山

武玉のやうよ中活をやく魚
欠物けて上京へ月のおぼけ者
花野狐て演技魚人

老鼠　晴天の秋を馬に祈望と尾
今　富士関の紙を赤子産寺
雞口　屑の家威情は決よ高き事
芳竹　伊勢行る変い意の幕吹き
柳尾　女湯よりき盗が持鈍足
小知　古人雖病御御祭へる
李門　山の月松を松る大海
測臺　茅よ竹を伐し秋
買明　元日よりよ東仲の市
平砂　言家人持持思い考え

秋色　女は分情義よ考
古簾　連寄の如く身も出果き
在將　岐阜石和福金考も夏芝お
今　湯治古庵る猪と泥鹿
太養　枕行雪よ飯蒸る
来示　布板通る陰るん
常風　通立を光ま
鶯鳳　岩京る神社仏閣
沾涼　急ケ合セ車ほ板車
田女　武尼の和寄よ源氏つま

仝 銭湯ハ虱も蚤も出ぬ拍子

晋阿 嵯峨山家泊る月夜の琴

仝 楊枝の稲荷の宮に三井の秋

百万 大生酔ハもと泥坊

祇徳 清太夫鼕の碁を打温泉場の雨

仝 嫐ハ武家より女房小町

秀玉 堀の雪舟絡切りに赤緋

菊堂 娩とお付合遠く寄る桜

宝馬 月光伽藍松しま花の欄

珪山 見ぬ斗ぬ手ぬ景ぬ着る其風

名物俳八

俳諧はもんうぬ臭きハ腹痛や
ちかきものなれど今包子も赤子も風
雅の道に至らぬ山の奥とかし
きれバ歩ミし入童蒙ハ早く
捨りし習ひ礫文字とも知り

多く魚鳥の朋友交を結び流
蹤は海内に遍く
糟粕を味ひ鶏骨奪胎故と
渥々新を考へ近代自亭の
桃席或催小津屋庵を
ふのみ手具と撰ぶ古人の

言葉を引いて賞を大設す
の口をもつて一名を
小物を八束西の好士亦劣しと
ぶ斎の書既定會の
相撲と取結ぶ元来四本柱の
周章もなれば桜樹箒を主

人と計ひ俳友の帰らんと
きかをちかし只有あり閑地を
と古儀ひ居為ず中へ軍配り
筆を執て文臺に向へば三十
六歌を初めて五十首詠ぶ
百手の発の勝負ちかりぬ

見て毎度取り句（発句）の
面白き掛あり咲き地取る
童のちうり別まと筆試
流るる為て家面自然と好む
而て利益をこの示を市是を集
多見あり之と合を探

げ〻仕合好き辛酉の清めの矣
夜の俤を当世竹葉風流
日し新なるハ后の芝子哉
作者のよ

安永四歳乙未春　竹葉城露十述

○星運堂壽梓　東叡山下竹町　花屋久次郎

俳諧觽　江都捻宗匠高点句集　墨跡印譜選　近刻

同後篇　同点式句ノ委細ニ記ス　画本墨規矩　近刻

俳風柳樽　初篇ヨリ八篇ニテ出来跡追々近刻

四季發句帳　江都捻宗匠句帳追加御句入　卯初秋出版

俳諧家雅見種　江戸捻宗匠宿所附　毎改　出来

和漢軍談記畧考　両面摺

耳聹私記 諸國珍說奇談とあるも 揮雄著 五

俳諧觸續篇 在義側高点并点印多 寄ヒ物等を委く記す 藏版

仝贅篇 近来退座の判者并古人とのつゝ判者 の言点多く等を記す

仝三篇 當時の判者寄ヒ物の半流りのみを委く記す 玄旨歌と赤蔦とを掲し出す 英蓉敬人雪成著

仝四篇 近刻

四季發句帳後篇 近刻

一枝筌 一座一卷宛

雙猨路談 其角座宗匠圖像

双喜會儀 在轉千句 恭評

吾妻童 金羅高点

鄙錦 吉門高点

綾錦

仝後篇 近刻

近在所名集 一漁撰

多嘉津句理 存義側高点 前句共

仝後篇 近刻

鹿島紀行 芭蕉翁自筆

若眼鏡

花實集

薄暮丹

種とり

神妙録 沢菴和尚語

投入花養 並活方百箇條

龍田詣 平かな附

霊符畧修法

増補軍談記畧考

大雜書　寸珍諷画本　箱入

天門八卦　新撰八卦　八卦竹馬抄

念佛看經抄

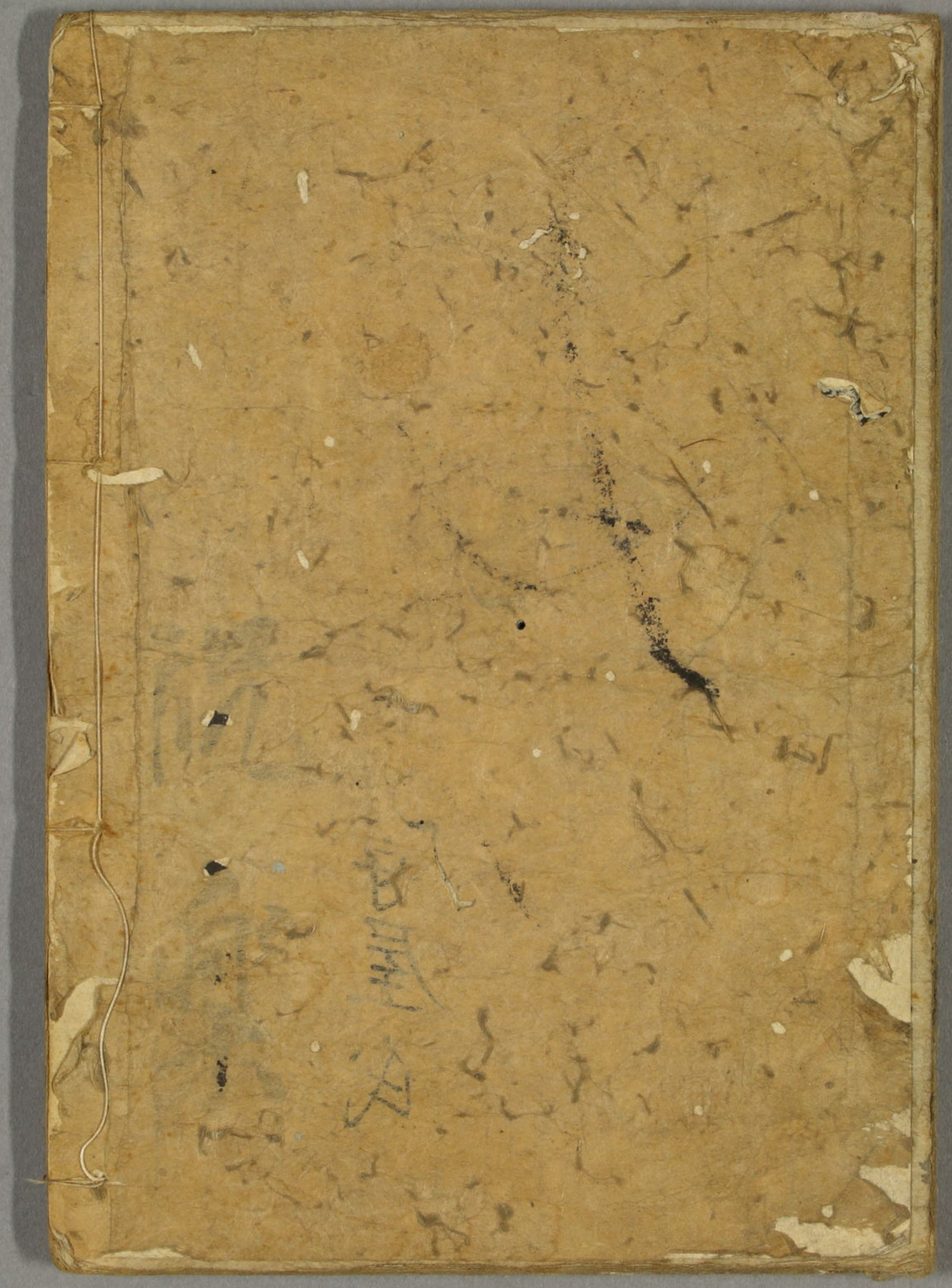
ちゑ順後歌

ぢんかう記

通寶塵却記

全　袋入

築山圖

役者信夫石

全末廣鑑　似顔繪本　彩色